マーシュ×企業広報戦略研究所

オンラインフォーラム

「ＷＩＴＨコロナ時代のリスク×サステナブル経営」

最新グローバルリスク報告書解説

マーシュブローカージャパンは、2月10日、企業広報戦略研究所（㈱電通パブリックリレーションズ内）の協力の下、企業のリスクマネージャーを対象に、オンラインフォーラム「ＷＩＴＨコロナ時代のリスク×サステナブル経営～２０２１年のグローバルリスクを読み解く～」を開催した。ＷＩＴＨコロナ時代のサステナブルな経営とは何かをテーマに２０２０年12月に開催したフォーラムの続編と位置付けられた今回は、メイヤー・ブラウン国際法律事務所のパートナーである村瀬悟氏による「地政学リスクの留意点～アメリカから見たバイデン新政権と米中関係、そして日本の位置づけ～」と、マーシュブローカージャパンの平賀暁会長による「グローバルリスク報告書２０２１年版速報」の二つのセッションが行われた。ここでは1月19日に世界経済フォーラムが発行した「グローバルリスク報告書２０２１年版」のポイントを解説した平賀氏の講演を紹介する。聴き手は企業広報戦略研究所の酒井美奈氏が務めた。

世界経済フォーラムがマーシュ・マクレナンをはじめとしたパートナー機関の協力の下で制作しているグローバルリスク報告書は毎年1月に公表されている。16回目となる今回、新型コロナウイルス感染症の世界的拡大を受けて、同報告書では「世界は長期的リスクへの対応に目覚めるべきである」という強いメッセージが発信された。

また、今回の報告書の特徴として、グローバルリスクを短期・中期・長期の3区分に分類した点が挙げられる。グローバルリスクは「発生した場合、今後10年間に複数の国または産業に著しい悪影響を及ぼす可能性のある不確実な事象または状況」と定義されているが、今回はこの10年間を3期間に区分。その結果、短期的リスクには「感染症の広がり」や「生活破綻（生活苦）」「異常気象」などが、中期的リスクには「経済大国の資産バブル崩壊」や「ITインフラの機能停止」「物価の不安定化」、長期的リスクには「大量破壊兵器」「国家の崩壊」「生物多様性の喪失と生態系の崩壊」が分類された。

「ブラック・エレファントに注意せよ」

平賀氏

平賀氏は3区分のリスクについて、「これを見ると、短期的リスクが中期的リスクに、中期的リスクが長期的リスクにつながっていく可能性があるということが分かる。また、大量破壊兵器と言えば以前は核爆弾だったが、今後は生物化学兵器も注視する必要があるだろう」との見方を示した。

さらに同報告書では、昨年度まで30あったグローバルリスクが35に変更された。この点について同氏は「単に5項目が新たに増えたのではなく、統合されたリスクや、従来のリスクが細分化されたケースもある」と述べ、新たなリスク分類がなされていると説明した。

同氏は、同報告書のもう一つのポイントとして、リスクの連関性を指摘。同報告書では、あるリスクの他のリスクへの依存度がどの程度あるかをひも付けて、どのグローバルリスクが一番連関性が強いかを考察しており、最も連関性の強いリスクとして「気候変動の適応（あるいは対応）の失敗」が挙げられていると紹介した。

この他、「フロンティアリスク」と銘打たれた九つのリスク（偶発戦争・民主主義の崩壊・小規模核兵器・永久凍土の融解による微生物やウイルスの放出・地磁気の乱れ・AIを活用してソーシャルメディアを通したかく乱やテロ行為・脳情報の悪用・遺伝子編集の悪用・医薬品の神経化学物質の悪用）にも触れ、「同報告書全体を通じて、格差・分断・不平等というキーワードが浮かび上がってくる。分断というのは国対国だけでなく、同じ国の中でも分断は起きている」と指摘。

新型コロナウイルス感染症によってすでに世界経済は影響を受けているが、今後、その回復のスピードは国によって異なることが予見され、その差によって新たな格差が生じる可能性がある。

ビジネスの面では、感染症の影響でメジャーとマイナーの二極化が進み、中小企業の事業が淘汰されてしまう可能性もあるとの見方を示した。

平賀氏は、すでに足元でも、リモートワークができる人・できない人といった分断が起きていることに言及し「最近ではブラック・スワン（想定外の危機の意）ならぬブラック・エレファント（見逃しようがないほど大きいにも関わらず見過ごされてきた危機の意）という言葉がよく使われているが、感染症のようにいずれ起きると分かっている長期的なリスクは、事前に対応しなければ甚大な被害につながりかねない。企業はこの機会にあらためて想定されるリスクについて真剣に考える必要がある」と警鐘を鳴らした。